



ひきこもりの当事者への支援について意見を交わした対話交流会
＝甲府・県福祉プラザ

対話から支援探る 全国巡る集会甲府皮切り

ひきこもりの当事者への支援を考えようと、KJHJ全国ひきこもり家族会連合会(本部・東京都豊島区)は15日、甲府・県福祉プラザで、当事者や市民らによる対話集会を開いた。3年間で42道府県を巡る計画で、全国のトップを切つて山梨で開催。ひきこもり

扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える

山梨日日新聞
2017 1/16 1面

への偏見が根強いとされる地方で、当事者支援をどう展開するかについて、経験者や支援者が意見を交わした。
ひきこもりへの理解を深めるとともに暮らしやすい地域づくりを促すのを目的に、「ひきこもり つながる・かんがえる対話交流会」と題して開催。この日は当事者や家族、ひきこもりに関心がある住民

ら約70人が集まった。「困っていること」「自分らしく生きるために」などを題材に、進行役(フアシリテーター)を中心に各グループで意見を交換。「あなたにとって『つながり』とは」をテーマにした話し合いでは、当事者が「世間の常識に合わせていのに、できない。自分をごまかせなくて、ひきこもり

になった」と経験を明かした。支援のあり方を巡っては「自分の弱さや不器用さを認め合う場があれば、不安を和らげたり、他人とつながったりすることができるとはいい」との提案があった。

対話交流会は山梨を皮切りに、2月以降は神奈川、茨城、東京で順次開く。2014年9月に発足した、ひきこもりの子がいる親の会「山梨県桃の会」の篠原博子会長は、「ひきこもり当事者支援の『後進県』と呼ばれた山梨から全国キャラバンが始まったのは感慨深い。今回の交流会を出発点に、ひきこもりへの理解と支援を地域で広げていきたい」と話した。

「扉の向こうへ」取材班
＝関連記事 27面

理解と共感でつながる

甲府で交流会 当事者、市民…立場超え対話

全国に先駆け、15日に甲府市内で開かれた「ひきこもりつながる・かんがえる対話交流会」。世間の偏見に苦しんできた当事者、ひきこもりと直接かかわってこなかった市民、どう支えていけばいいか悩んでいる支援者。異なる立場の人々が対話を通して理解と共感を深め、暮らしやすい地域に向けて何ができるかを考えた。



意見を交わす当事者や家族ら。模造紙には、支援についての提案が所狭しと書き込まれた

甲府・県福祉プラザ

「人ごとではない」

扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える

会場に入ると、何十人もの参加者の熱気に気おされた。こんなになくさんの人に囲まれるのは何年ぶりだろう。峡中地域のひきこもり当事者の男性27人は、スタップに「好きな席に座ってください」と促されて着座した。最初のテーマは「困っていること」。オレンジ色のペンを手に取り、テーブル上に広げられた模造紙に「居場所がない!」と大きく書き込んだ。

交流会では、これまでの経験と胸の内を語った。声が震える。自分の話は、どんなふうを受け止められているのだろうか。上目遣いで周囲を見渡すと、うなずきながら耳を傾ける人が目に入ってきた。「理解しようとしてくれる人がいる。最後まで迷ったけれど、ここに来て本当に良かった」

「社会の至るところに孤立の入り口があると感じた」。ひきこもりについて調べている大学院生の相崎さん(28)は、当事者の経験談に自らの体験を重ね合わせていた。

「コミュニケーションが苦手。大学時代に親友が休学後、キャンパスで会話する機会が激減した。ひきこもりにはならなかったが、人ごととは思えず大学院で研究を始めた。当事者から聞くひきこもりのきっかけは、就職活動の失敗や同僚との不仲などさまざま。『この年代でも、ふとしたきっかけで孤立するリスクがある』。自分は経験者でも

支援者でもない。ただ、ひきこもりは誰にとっても無関係ではないことを伝えていきたい。思いを新たにしたい。

「どう支援すればいいか、分からなかった」。甲州市社会福祉協議会の古屋美紀さん(49)は生活困難者の自立支援に携わっているが、ひきこもりは家族から相談があっても、当事者にはなかなか近づけない。腫れ物に触るような距離感でかかわってきた。

この日の意見交換を通して、当事者が自由集って話し合える「居場所」が、当事者の身近な場所に必要だと再確認した。併せて「ひきこもった理由を聞いてほしい気持ちがある」という当事者のひとりが打ち明けた言葉に、ヒントをもらった気がした。「当事者の境遇や思いは人それぞれ。支援に向け、まずは生活実態を把握することから始めたい」。心の中の霧が少し晴れたような気持ちで、会場を後にした。

山梨日日新聞
2017 1/16 27面